

五 救いは近づいている

ローマの信徒への手紙 十三章八節―一四節

二〇〇八年十一月二十日礼拝説教 秋吉隆雄 牧師

講壇の前のロウソクに一本火が灯されました。イエス・キリストのご降誕を待つアドベント、今日はその第一主日です。最近の新聞やテレビで報道される出来事は、本当に気の滅入るような出来事が多く、悲しい思いがつのるばかりです。このようなかで神さまが遣わされた独り子イエス・キリストを迎える、それはどんなことなのか。神さまの思いとわたしたち人間が営んでいるこの社会がどのような関係にあるのかを思いながら、ご降誕の日を待ちたい。そしてイエス・キリストがもたらされた救いの事実をしつかりと受け止めるようなクリスマスを迎えたいと思っています。

アドベントの第一主日にわたしたちに与えられた御言葉は、パウロの記したローマの信徒への手紙（ロマ書）十三章八節から一四節までです。パウロは時の都ローマにある教会を訪問したいと熱望していました。そして彼はローマの教会に宛てて手紙を書きました。その手紙・ロマ書はパウロの他の手紙とは違って、キリスト教信仰の骨格を神学的に弁証する論文のような手紙になっています。その後の教会はこのロマ書を基本にして神学を展開しています。キリストの福音は何であるかを明らかにした書物、キリスト教信仰の教科書、それがロマ書であります。パウロが明らかにしたキリストの福音は、代々の教会では「信仰義認」という言葉で受け止めて、それを伝道してきました。「信仰義認」とは、信仰によって、神さまに義と認められ、受け入れられることです。これがパウロの宣べ伝える福音で、人間の救いでもあります。信仰によって神に認められ、神と共にある救いが与えられる。この表現は、人間の救いは信仰によってという信仰の営みが救いの条件のように聞こえます。ですから、逆に信仰のない者は救われまいということになるわけです。しかし、パウロが「信仰によって」と言った場合、それは反対の「行いによって」という言葉が念頭にあったのです。パウロは律法の行い、良い行いを積み重ねることによって救われるのではなく、ただ信仰のある者が救われていると語ったのです。当時の社会は徹底して宗教社会でありました。全ての人が何らかの宗教を持っていて、厳しい自己否定、そして多くの献げ物をして自

らの信仰の熱心さを表していたわけです。彼らの宗教は文化的飾り物ではなくて、それこそ命がけの信仰であったわけです。皆が競い合うようにして自分の信仰の熱心さを表しました。そこに自分のアイデンティティを求めていたわけです。そのような宗教的背景の中でパウロは「いいえ、イエス・キリストの十字架と復活によって、あるがままのあなたがたを神は義として下さっています」と語ったわけです。厳しい自己否定や献げ物をする行いではなくて、あるがままのあなたがたが神さまによって義とされていると語ったわけです。これは、当時の人々には天にも昇るような福音でありました。厳しい宗教生活を守ることに汲々としていたのに、何もしなくても、行いはなくても神はそのままのわたしを是認してくださる。そして神と共に生きる祝福に与ることができる。これはすばらしい解放であったわけですね。パウロはこのことを「行いではなく信仰によって義とされる」と語ったわけです。

最近の神学者たちは、この福音を正確に表現するために、こう語っています。「信仰」という言葉はギリシャ語では「ピステイス」と言います。このピステイスは「真実」と訳すこともできます。今わたしたちが使っている共同訳聖書のガラテヤ書にこう訳されています。「人は律法の実行ではなく、ただイエス・キリストへの信仰によって義とされる」。この訳は信仰が救いに与るための条件ですね。新しい律法のようになっているわけです。ここでは信じない者は救いから排除されてゆくわけです。けれども、「律法によってではなく、『イエス・キリストの真実』によって義とされる」と訳すのが正確ではないかと言われています。イエス・キリストが自らを十字架に架けて人間の罪を贖い赦してくださった、このイエス・キリストの真実によって福音が全ての人に与えられている。この訳と解釈の方が正しいと私も思います。わたしが信じたから救われたのではないでしょう。わたしが信じるずっと前にイエス・キリストは十字架にかかって全ての人を是認して下さっているわけですね。聖書を通して、教会を通して是認の恵みを知られました。この恵みにアーメンと言って受け入れた。これがわたしたちの信仰でありましょう。パウロは、血のにじむような自己訓練や気の遠くなるような献げ物をして、すなわち律法の行いによって救われるのではない。そうではなくて、神はイエス・キリストの十字架によってすべてを赦し、今あるあなたをそのままよしと認め、是認して、愛の関係を共に生きられますと語ったわけです。これはすばらしい解放で、人々はこれを福音として受け入れたわけですね。

この時に人々は二つの間違いを犯してゆきました。一つは、律法ではない、行いではないと聞いて、ある人々は、そんな安価な信仰はありがたいと放縱に走っていききました。倫理はどうでもよいという具合にしていたのです。パウロはロマ書の中で、その彼らの言い分をこう伝えていきます。「わたしたちは律法のもとはなく、恵みのもとにいるのだから罪を犯しても良い。無条件、無償の赦しの恵みに与っているのだからこの世の生き方はどうでもよい。罪を犯し続けよう。」こういう群れが教会の中に現れたわけです。グノーシス派はこれに近いと思われる。もう一つの間違ひは、自分たちはイエス・キリストを信じて義とされたのであるから、わたしたちの生き方はイエス・キリストによって清められ、聖なる者であるという思い上がり、傲慢に陥っていきました。この人々は信じない人々を軽蔑して、排除することに熱心になっていきました。律法を求めないから放縱でよい、また逆に信じた者はすでに清い者、正しい者になっているという傲慢、この二つの方向に人々は間違っていたわけですね。

パウロは、「あるがままのあなたで良い。キリストはそのようにわたしたちを受け入れてくださいます」と語りました。それが、パウロの福音の核心でした。けれども、そのパウロは、神に義とされた者は新しい律法を力強く生きると、今日の御言葉で語ろうとしています。一三章の八節から一四節までは、パウロが語った新しい律法、クリスチャンがこの世で生きる新しい生き方を語った箇所なのです。読んでみると分かることですが、パウロは、「悔い改めてよい子になりましたよ」などという安直な勧めではなく、神の歴史、愛に関する深さの中から「新しい律法・キリスト教倫理」というものを展開しているわけですね。

まず始めに八節から一〇節までをご覧くださいと思います。「互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがなくてはなりません。人を愛する者は、律法を全うしているのです。『姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな』、そのほかどんな掟があっても、『隣人を自分のように愛しなさい』という言葉に要約されます。愛は隣人に悪を行いません。だから、愛は律法を全うするものです。」

「互いに愛し合うことのほかは、だれに対しても借りがなくてはなりません」という言葉は誰に対しても何の借りも残すな、ただし互いに負っている愛の負目は別だという意味です。わたしはこの言葉を誤解していました。誰に対しても借りを作るな。とんでもない。私は人に借りばかりして生きてきた。こんなことを語るパウロはどんな生き方をしてきたのだからと考えてきました。けれども正しく

は、「借りを作るな、ただし愛の負目は別だ」という意味なのです。これは解ります。愛の負目はあって良いのですよ。人は愛し愛される。そういう関係の中でわたしたちは生きています。愛の負目は誰にもあるわけです。愛の負目のない人は一人もいないわけです。愛に向かう関係、それはプラス、プラスになっていくわけです。共に向上していくわけです。ですから、パウロは、「人を愛する者は律法を全うする。」ガラテヤ書では、「律法全体は『隣人を自分のように愛しなさい』という一句によつて全うされるからです」と書いています。パウロは信仰のみを語って、律法・行いは無視したと言う人がいますけれども、決してそうではありません。彼は新しい律法「互いに愛し合う律法」を力強く語っているわけです。モーセの十戒の中に、「姦淫するな」、「盗むな」、「殺すな」、「むさぼるな」という戒めがあり、更にいろいろな掟があるけれども、「隣人を自分のように愛しなさい」という言葉に要約されると言っています。一〇節では、「愛は隣人に悪を行いません」と言っています。隣人に悪を行うのは愛の反対なのです。隣人への悪は互いにマイナス、マイナスに向かっていくわけです。愛こそが律法を全うするのです。イエス・キリストの十字架の真実によつて義とされたあなたがたは、愛に向かって真つ直ぐに、そして力強く生きなさい。これがパウロの新しい愛の律法なのです。

その勧めはどこから出てくるのか。それが後半の一節から記されています。

「更に、あなたがたは今がどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武器を身に着けましょう。日中を歩むように、品位をもつて歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。」この聖句は、アウグスチヌスが回心した有名な聖書の言葉だと言われています。アウグスチヌスはそれを自伝の『告白』の十二章二九節にこう書いています。「わたしはこう言いながら、心を打ち砕かれ、ひどく苦い悔恨の涙にくれて泣いていました。するとどうでしょう、隣の家から繰り返し返したような調子で少年か少女か知りませんが、『取りて読め、取りて読め』と言う声が聞こえてきたのです。そこでわたしは、急いでアテギウスの座っていた場所に戻りました。そこにわたしは立ち上がった時に、使徒の書を置いてあったのです。それ

をひったくり、開き、最初に目にふれた書を黙って読みました。宴樂と泥酔、好色と淫乱、争いと嫉みを捨てよ。主イエス・キリストを着よ、肉欲を満たすことに心を向けるな。わたしはそれ以上読もうとは思わず、その必要もありませんでした。というのは、この節を読み終わった瞬間、いわば安心の光ともいうものが心の中に忍び込まれてきて全ての疑いの闇は消え去ったからなのです。「アウグスチヌスは悶々と苦しみもがいていました。その時に子ども「取りて読め、取りて読め」と言う歌を聞いた。彼は使徒の書、このロマ書一三章の一三節後半から一四節の御言葉を聴いたわけです。その時に彼の心の中に安心の光が注がれて、疑いの闇は全く消えていったと書いています。この後半に、「それからわたしは母のところに行き、打ち明けました。母は喜びました」と書いています。母モニカの祈りが聞かれたわけでありましょう。この世的な野心家であったアウグスチヌスはこの御言葉によって欲望の満足、肉の心を捨てて、キリスト教会に大きな貢献をする大神学者に変身していったわけですね。アウグスチヌスを回心させた御言葉という意味でこの聖句は大変有名になっています。

私は、今日の御言葉にパウロの律法に対する基本的考え方、主張があると思っています。酒宴と酩酊、これは酒に溺れて現実を忘れるということです。淫乱と好色、セックスに溺れて現実を忘れるということです。争いとねたみ、けんかばかりする、そしてやるせないねたみ、これらをパウロは闇の行いと言っています。パウロが走り回って伝道したその時に見た光景は、このような闇の行いであったに違いありません。ロマ書は、パウロが最後に書いた手紙だと言われています。紀元五十七、八年頃でしょうか。この頃、ローマ帝国は、日の出の勢いで地中海地方を席卷してゆきました。しかし、それはローマ人で日の目を見た人々の栄耀栄華でありました。その栄耀栄華の影で生きていた非ローマ人達は人間として認められずに酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみの闇の行いの中に埋もれていたわけですね。そのことをパウロは同じロマ書八章でこう書いています。「被造物は虚無に服している。被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっている。」パウロが伝道地で見えたものは、人間の闇の行いだったわけですね。そのような行いに走らざるを得ない人間の虚無、苦悩というものが満ち溢れていたわけです。そのような彼らに対して、「隣人に悪を行な、隣人を自分のように愛しなさい」と言ったところで聞いてくれそうもないのですね。けれども、パウロはその彼らに向かって、どこまでも愛の律法を語り続けたわけですね。何故、

パウロはそのように語り続けることができたのか。それは、あなたがたは「時」を知っているからであると言うんですね。時（カイロス）、これは神が支配しておられる時ですね。神が支配しておられる時を知ると、眠りから目覚める時であることを知らされると言っています。今やわたしたちが信仰に入った頃よりも救いは近づいている。夜は更け、日は近づいた。救いは近づいていると言っています。

これは、神が歴史に決着をつけてくださる終わりの日、終末の時であります。その日には全ての者が全き救いに与りますが、その救いの日、終末の日がどんどん近づいていると言っているわけです。神の光に照らされる明るい喜びの日が近づいている。この終末信仰が愛の律法を生み出し、その律法を生きることが可能にしていく。これがパウロの信仰なのです。パウロの語った福音は、人間の救いは立派な行いを積み重ねることによって得られるものではない。そうではなくて、神の子、イエス・キリストの十字架と復活において全ての人がすでに神さまによって義とされ、贖われている。あなたは神に受け入れられ、祝福されている。ですからわたしたちの信仰は、神から無限に、無償で、恵みをいただいていることを受け入れ、信じる。これがわたしたちの信仰なのです。

そこで、わたしたちがこの世で生きる生き方、人間との関わりはどんな関わり方かということが問題となってくるわけです。「行いはどうでもよい、放縦にまかせよ」ではない。「悔い改めて良い子になりましょう、また、良い子になりました」と驕るでもない。神さまは共にいて無限に赦してくださいさる、そして神さまは歴史に完成をもたらししてくださいさるのです。それは夜の暗さではなく、昼の明るさの中で喜びの中に招かれるような素晴らしい時であります。この終末を望む時に、日中を歩むように品位をもつて歩むことができます。パウロは極めて自律的でありますよね。そして極めてパウロは責任的な生き方をしていますね。この自律と責任をしっかりと支えてくれるもの、それは、救いは近づいているという信仰です。イエス・キリストの再臨によって与えられる終末の日、このことをリアルに待ち望む信仰がパウロをあのように立たせていったわけです。キリスト教信仰が生み出す新しい律法は、こうしなさい、ああしてはいけませんというような倫理的要請ではない。そうではなくて、今はどんなに破れていようと、終わりの日を信じて望むがゆえにわたしはこのように生きる。そういう神の歴史支配に対する信仰から新しい愛の倫理に生きるということが可能になってくるわけです。このことは本当に大事だと思っています。このような信仰は、今の時代には受け入れ

難いかもかもしれませんけれども、わたしは、それがわたしたちを愛の律法に向かつて生かすための何より確かな力であると信じています。平板な倫理的要請ではなくて、終末の日を望む、その日を望む時に立たせられてゆく信仰・倫理、これがパウロの「救いは近づいている」という言葉なのです。

今日からアドベントに入りました。イエス・キリストを待つ時です。この時に、今日の御言葉から終わりの日待ちながら生きる、そこに確かな信仰の力があるということを変更して心にとどめたいと、そのように示されます。